



「共生の大地・アリアンサ」を出版しました。 ブラジルに協同の夢を求めた日本人

木村 快著 同時代社刊 (A5 版 352 頁) ISBN 978-4-88683-751-6

定価は 3,500 円 + 消費税です。書店でもネット通販でも購入できます。



移住の歴史を忘れたわたしたち

NPO 現代座はブラジル・アリアンサ村の人々と日本人移民史資料の発掘を続けていますが、そのまとめとして「共生の大地アリアンサ」を出版することになりました。

「アリアンサ」とは協同・約束を意味するブラジル語です。大正時代、協同組合組織で理想の村を建設しようという日本人によって開設されたためずらしい移住地で、今でも日本の伝統文化を大切にし、日本語の通じる村です。けれど、戦前、日本政府の移住政策に批判を持ち、抵抗したため、公的ブラジル移住史から抹殺され、村の生い立ちがわからなくなつた村でもあります。

一九九四年、ブラジル移民の三〇年ぶりの帰郷を題材とした現代座の演劇作品『もくれんのうた』が日本ブラジル通商条約百周年記念行事としてブラジルへ招聘され、約一ヶ月間をかけて十一の都市とサンパウロ州奥地のアリアンサ村で上演活動を行いました。

移住者の帰郷を扱ったシリアスな会

話劇なのに、どの都市でも人々は俳優の一挙手一投足に爆笑し、歓声を上げていました。それは舞台を鑑賞しているのではなく、祖国からはるばるやってきた同胞との再会だったので。

終演後、「わたしたちのことを忘れてないで欲しい」と目に涙を浮かべながら俳優たちの手を握って帰っていく人々。アマゾンのベレン市では二日がかりの船旅でやってきた人々もあり、かつて一九六〇年代に毎日新聞に連載された小説『アマゾンの歌』のモデルとなつたトメアスからも八時間のバス旅で多くの人々がかけつけてくれました。

帰国する際、お礼の気持ちで、何かお役に立つことがあればと伺つたところ、アリアンサでは日系子弟のために正確な歴史を残しておきたいのだが、日本側の公的移住資料が見つからなくて困っているとわれ、帰国後、専門家に相談してみますと約束しました。

一九九四年の時点ではブラジル日本文化協会の『ブラジル日本移民八十年史』（一九九一年刊）が唯一の公的移住史でしたが、残念ながら日本政府がどのような形で移民を送り出したかについての記述はなく、アリアンサについての記述もありませんでした。

帰国後、実は戦前の移住資料は散逸してしまい、日本にはブラジル移住史の専門家がいないことを知りました。移住博物館でも「戦前の資料は扱っていません」と言われ、途方に暮れました。戦前、国策で二〇万人以上もの移

住者を送り出し、現在はその子弟を二〇万人以上も労働力として導入しているながら、そんな歴史は知りませんという国があつていいのだろうかと思ひました。

NPO 現代座は NPO 事業として、ブラジル側と共同で「アリアンサ史研究会」を設立し、「ありあんさ通信」を発行しながら、日本では公的資料の調査、ブラジルでは日系社会に眠っている資料を発掘するため、移住に関係のある人々を訪ねて歩きました。ブラジルでも日本でも、ほんとうに多くの方々が協力してくださいました。おかげさまでやっとブラジル移民がどのようにして送り込まれて行ったのか、アリアンサはなぜ国策と戦わねばならなかったのか明らかになりました。

二〇〇八年、ブラジルでは「日本人移民百周年」を記念して祝いましたが、日本側では「移住・移民」の言葉は使わず、「日本ブラジル交流年」と呼び、マスコミでも「移住」が日本の国策であつたことについてはいっさい触れていませんでした。

ブラジル公演から十九年、戦前移住にかかわられた協力者の方々もほとんど亡くなられています。わたしたちは追悼の意を込めて「あなた方のは決して忘れてはけません」と言い続けるためにこれをまとめました。

一人でも多くの方に、ブラジルへ移民された人々のことを知っていただきたいと願っています。

お問い合わせ先

NPO 現代座

〒184-0003 東京都小金井市緑町5-13-24

TEL 042-381-5165

FAX 042-381-6987

ホームページ

<http://www.gendaiza.org/>

担当：木下美智子

michiko@gendaiza.org

「共生の大地・アリアンサ」の内容

ふしぎな村

日本人にとってブラジルとは戦前十九万人、戦後五万三千人の移住者を送り出した国である。そして、近年は外国人労働者として三〇万に及ぶ日系人を導入し、日本の産業を支えている。

そのブラジル・サンパウロ州の奥地にふしぎな村がある。大正一四年に開設されたアリアンサ移住地である。この村はアリアンサ（盟約・協力）という理念を示すブラジル語の名称を掲げ、日本人が集団地を「植民地」と自称していたことに対して、あえて移住者自身の意志を示す「移住地」としたことでブラジル社会の注目を集めた歴史を持つ。

アリアンサには昭和一一年に出版された『創設十年』という本格的な移住地史が残されている。それによると、大原始林の中にアリアンサを中心にした日本人移住地が、東京二三区の約半分の面積に相当する約三一八平方キロの大移住地を形成している。当時の村の人口、産業、教育、宗教などの実情は精密に記されているが、なぜか昭和二年から六年にかけての歴史が空白になっている。

公的移住史とされる『ブラジル日本移民八十年史』にはアリアンサ移住地についての記述はない。この村がどのような経過で実現し、なぜ今日まで継続しているのかは謎であった。

多文化共生のシンボルとされる移住地

この移住史から消えた移住地で、ブラジル移民百周年にあたる二〇〇八年、この村の文化センター的存在であるNGO・コムニターデ・ユバ（ユバ協同農場）がブラジル連邦政府から第一八回マツシヤード・デ・アシス記念文化功労賞を受賞し、ブラジル社会を驚かせた。表彰理由は「ブ



テアトロ・ユバの舞台「タツル」

日本演劇が上演され、多くのブラジル人が詰めかける。日本人の知らない日本文化の村が生きているのである。

協同組合移住地を造れ

この村の建設を計画したのは日本力行会の永田稠（しげし）と移民社会草分けのジャーナリスト輪湖俊午郎、長野県庁の農業指導員だった北原地価造だという。開設責任者の永田稠は日本力行会という青年支援ボランティア組織の指導者で、数多くの著作が残されている。永田稠は日露戦争従軍者であり、明治二一（一九〇八）年、日本力行会員として渡米。アメリカ移民のための協同組合運動に奔走した人物である。一方、輪湖俊午郎も排日下のアメリカで移民の惨状を目撃しており、日本政府の移民政策に批判の目を向けていた。

一九二五年、この両者がブラジル・レジスト口植民地の北原地価造邸で会合する。ブラジル移民の現状は悲惨だった。日本政府は移民を送り込むだけで、あとは移民自身の責任と

ラジル文化に対する際だった貢献」とあり、特にユバ・バレエ団の上演活動と日本文化の継承にあるという。

ほとんどの日本人移住地が姿を消した現在、いまだに日本語の通じる村であり、毎年クリスマスにはユバ

による音楽コンサート、バレエの上演、日本語による

する棄民政策であった。出稼ぎのつもりが帰国はかなわず、自然発生的に生まれる集団地では医療、産業施設、子弟の教育の手段はなく、希望のない生活を送っている。

二人は移民自身による自治を原則とした協同組合移住地を開設し、協同の思想を移民間に普及する必要があると考える。永田は日本で移住組合法の運動を起こし、輪湖は複雑なブラジル社会に分け入って移住地を開設する計画を練った。こうした考え方は当然、国策移民会社と対立することになり、関東大震災以後の混乱した政情に翻弄されながら、長い闘いの歴史が始まる。

青年たちによる移住地建設

日本力行会は青年たちに「ブラジルに理想の村を造れ」と呼びかけ、数百人の青年をアリアンサ建設に送り出している。移民社会の実権を握る国策移民会社でさえ二の足を踏む大移住地の建設である。北原地価造は自ら測量の先頭に立ち、青年たちを指導しながら開発を進める。まさに常識を覆した移住地建設運動であった。

その中に後の弓場協同農場の創設者弓場勇がいた。弓場は協同精神の道場として野球チームを編成し、全ブラジル移民野球大会で三度の優勝を果たし、アリアンサの名を知らしめた。同時に野球遠征を通じてサンパウロ各地の日本人集団地を調査し、アリアンサ村のあり方を論じ合った。

アリアンサ支援の移住組合法は成立したが

日本国内では大正デモクラシーと呼ばれる世情を背景に移住組合法制定運動が展開され、昭和二年三月、ついに海外移住組合法が公布され、海外移住地建設の道が開かれた。

ところがその直後、田中義一政友会内閣が成立すると、民法として成立したはずの「海外移住組合法」が、一転して、政府主導の、政府の認めた移住組合だけを対象とした法律に

変貌し、アリアンサへの資金助成は拒絶される。アリアンサが行き詰まれば、その後を国策移民会社が收拾するもくろみだったようだ。

闇に消えた国策移住政策

田中政権は満州移住の土台を作るため、全国都道府県に海外移住組合を組織し、ブラジルに「一県一村移住地を建設せよ」と指示を出す。各県に自力で二百戸単位の村を開設する経験を積ませるためである。そのため、政府資金を投じてブラジルに広大な土地を確保することになり、その実行組織として鈴木喜三郎内務大臣を会頭とする「海外移住組合連合会」が設立される。しかし現地大使館からは繰り返し田中首相宛に反対意見が送られる。問題は誰が責任を持つて実行するかという段階で、内務省出身の植民地問題の専門家梅谷光貞に白羽の矢が立つ。

梅谷は秘書兼参謀としてアリアンサの輪湖俊午郎を登用することを条件に専務理事を引き受ける。梅谷は時間をかけ、政府筋を説得しながら「一県一村移住地建設」は不可能であることを納得させ、全県一括大移住地造成に転換させる。そうした事業展開の中でアリアンサ救済を実現させるつもりであった。輪湖はバストス、チエテ、アサイといった大移住地の開発事業をサポートする。昭和二年から六年にかけてのことである。

梅谷と輪湖はブラジルの大移住地建設をやり遂げ、アリアンサ移住地の救済にとりかかるが、あと一息というところで政府はまたもや移住政策を逆転させ、梅谷・輪湖を更迭。今度は逆にアリアンサを国策移住地に併合する方針を打ち出してくる。

海外移住組合法の逆転劇も、この一県一村移住地建設の成り行きについても、梅谷光貞、輪湖俊午郎の名とともに公的移住史には一切記述がない。今なお日本近代史の闇の

中である。

輪湖俊午郎は一九六五年に七五歳で没する。彼を知る人々によると、ブラジル移民最大の事業を取り切りながら、決して自らを押し出すことのなかった人物で、「本当の移民史を書き残すことができなかった」が最期の言葉だったという。そして輪湖の家は戦後、輪湖が開設に奔走したチエテ移住地のダム湖の底に沈んだ。

珈琲（コーヒー）より人を作れ！

アリアンサの国策併合方針が打ち出された一九三一年は冷害でコーヒー栽培が打撃を受け、アリアンサ住民は動揺していた。アリアンサの夢は破れたかに見えたが、アリアンサは国策に屈服しなかった。現地に乗り込んだ永田稠は「力づくの併合は必ず破綻する。なんとしても自立した協同精神を守れ！」と青年たちを激励し、移住地再建に取りかかる。アリアンサは「珈琲より人を作れ！」を合い言葉に国策併合を拒み、第二次アリアンサ運動を展開する。

一九三一年の満州事変と一九三三年の日本の国際連盟脱退によって、ブラジルの対日世論は悪化し、日本人は敵性国民として非難、圧迫されることになる。アリアンサは移民保護の立場から、国策移住地側と話し合い、五年後に運営権を移管する代わりに、個人加盟の新しい全アリアンサ農業者組合設立を提起する。国策側も同意する。

一九三四年、ブラジル政府は憲法を改定し、日本移民の抑制に踏み切った。さらに日本語教育が禁止される。後続移民を絶たれることは日本文化消滅の危機を招来する。移民たちの生活は揺れた。



このとき、「アリアンサを守れ！」と弓場勇を筆頭とする産業青年連盟が台頭する。青年たちは村の道路を無償で補修し、農家の生産物輸送を効率化すると同時に、村人相互の信頼関係を築き、全アリアンサ農業者組合に統一するサポーターとなる。

弓場協同農場が生まれ、望む者は誰でも受け入れ、養鶏普及運動を展開した。病人、高齢者、働き手を失った家族などを積極的に受け入れ、病人には療養を、女子供には清掃や選卵などの軽作業をと、本人の実情に応じた生活を保証し、農場員の心の協同性を高めるために日常生活の中に合唱、演劇、美術などの芸術活動を取り入れた。

生き抜くアリアンサ

太平洋戦争が始まり、敵性国民に対する取締令が強化される。日本人の移動は禁止され、三人以上が集まって会話することさえ禁止された。だが、アリアンサ・ユバだけは例外的に自由な生産活動が許される。すでに二〇万羽の養鶏場を築き、サンパウロ市への鶏卵の供給が公共性を持った事業として認められたからである。ユバ農場は二八〇人の大農場となる。

やがて日本の敗戦を迎えると、日本人に対する移動の自由が保障され、農場員も拡散して半数になる。反面負債が増大し、銀行は営利本位の経営を要求するようになる。弓場はあえて自己破産の道を選び、理念に共鳴する者だけでまた無一文から再出発する。

激変する戦後社会に翻弄されながらも、ユバは創造する百姓を目指して、農場を芸術の拠点として生きつづける。

弓場勇は一九七七年暮れ、交通事故で没するが、弓場勇が夢みた「創造する百姓」集団は幾度も破産の危機に遭遇しながらも、多くの人々の支援を受け、アリアンサの生き証人として生き続ける。アリアンサは開設から八八年を迎える。創造する日系の村は多文化共生の一角に生きていく。

共生の大地・アリアンサ



ユバ・バレエを育てたアリアンサ

昼間はごく普通の農園労働者が、いったん舞台上に立つとブラジル人を熱狂させるバレリーナに変身する。ユバ・バレエは農民バレエ団としてブラジルの多文化共生の一角を彩る。日本語を生活語とするユバでは、当然日本の伝統的な踊りも得意とする。アリアンサは現在の行政区域ではミランド・ポリス郡アリアンサ地区である。かつては二千世帯一万人の住む日本人移住地であり、アリアンサを対象として周辺部の商業区域が発展し、現在のミランド・ポリス市となっている。

上・左の写真はアリアンサ中心部で、最初の開拓地点である。戦後は日系人の都市集中で人口は



激減したが、今なおコムニターデ・ユバをセンターとして、二百世帯前後の日系人が日本文化のコミュニティを守っている。

日系文化のふるさと

アリアンサ中央公園にはアリアンサの歴史を示す様々なモニユメントがある。まず正面にそびえる巨石を組み合わせた「祈り」像はアリアンサ創設者永田桐を輪湖俊午郎と北原地価造が支えた協同を表している。ユバ農場で活動を続けた石彫家・小原久雄の作品である。

アリアンサは日系ブラジル文化発祥の地でもある。ブラジル短歌・俳句の先駆け、岩波菊治、木村圭石、佐藤念腹の歌碑が建てられている。一九二五年（大正十四）に日本力行会アリアンサ建設先発隊として入植した岩波菊治はアララギ派歌人島木

赤彦の弟子であり、ブラジル短歌の普及に努めた。

一九二六年（大正十五）には高浜虚子の弟子佐藤念腹と木村圭石が入植。この三人が一九三〇年にアリアンサで発行を始めた「おかぼ」がブラジルにおける句誌・短歌誌のはじまりである。この日本特有の短詩形文学は、日本語新聞への投稿という形でたちまち移民たちの間に広がっていった。

アリアンサには日系歌人最長老の新津白鴉師がおられ、今なお村人とともに短歌会を継続しておられる。日本からの文化支援は期待できず、日本語の継承は難しく、ブラジル短歌・俳句の未来も厳しい。だが、多くの移住一世・二世たちが残した短歌や俳句は、民衆の生きた歴史証言である。何時の日か日系人のアイデンティティとして見直される日が来るだろう。



ふるさとの信濃のくにの山川は
ここにしみとわに思はむ
岩波菊治 歌碑



藤寝椅子
したしむ 南十字星
木村圭石 句碑



珈琲（コーヒー）の
花あかりより いでし月
佐藤念腹 句碑